

世界平和記念聖堂（広島）について

酒井 貞

先日、午後、岡山市内の営業活動のあと、ちょっと時間の余裕ができました。そこで、急に思い立って新幹線に飛び乗って広島へ行きました。その目的は、「世界平和記念聖堂」の建築を見ることでした。ごく最近、戦後の建築物としてはじめて国の重要文化財に指定された建築です。戦後建築界の屈指の村野藤吾さんという建築家の作品です。広島では、あわせて丹下健三さんという、これも戦後の建築家としては一世を風靡した建築家設計の広島平和資料館も重文指定されました。



聖堂外観



聖堂内部（この後ろにパイプオルガンがある）

そして、「世界平和記念聖堂」に到着して、久しぶりに建築に圧倒されました。まず、カソリックの教会故に来訪者を大切にする習慣が根を張っていると思いました。ボランティアの中年女性がぼくを見つけて、見学したいという申し出に快く応じてくれ、鍵をもって、ほぼ建築全体を細かく案内してくれました。その心がしみこんで来るような丁寧な案内です。

教会には高い塔がつきものですが、その塔の上まで、つぶさに案内を受けました。そして、礼拝堂の中にもどると、夕方近くか、パイプオルガンの練習ということで、すごい教会音楽が堂に満ちあふれていました。聖堂の美しいステンドグラスからのほのかな夕方近くの光の中で、その壮大な音楽に包まれて、それこそ、このごろよく使われる言葉ではありますが、本当に「鳥肌がたつ」というか、金縛りになるというか、そんな感動を覚えました。ぼくは、クリスチャンでもありませんし、どちらかといえば無神論者という感じの男ですが、こういうところに宗教的感動があるのかなとつくづく思いました。仏教の読経に包まれる感覚と共通なのだろうと思います。こうした体験の中から、安らぎや癒しをうるというのも、大きな宗教の役割なのかな、そんなことが今の日本

には、きわめて希薄になっているな、そんなことも考えました。

さらに、この建築の成立の過程でのいくつかの話が感動的でした。戦後の1954年というきわめて厳しい復興途上の日本での話であったことです。そして、被爆者への鎮魂への気持ちから、資金や知恵や技術が多くの人々の力の結集によってなされたことです。村野先生は設計料を受け取られなかったそうです。魂から発した建築デザインをボランティアで提供されたということだろうと思います。

コンクリートの打ちはなしをデザインの基調にすえたのは、ローコスト化の意味も大きかったようです。塔の内部の外観としては見えないところは、打ちはなしというよりは、やりっ放しで型枠のでこぼこや木目がそのまま残っていて、われわれ年代の経験者には、ひどくなつかしいものでした。また、構造体の骨組みはラーメン構造とし、その間をコンクリートブロックで埋めて壁面構成しています。そのコンクリートブロックは、「現地の川砂」を使って現場で普通の煉瓦の大きさに成型して製作されたものだとききました。そして、その素朴な肌合いが美しい壁面をつくっているのです。人々の鎮魂の重たい思いが一つひとつのコンクリートブロックに込められていて、今も存在しているのではないかと思いました。建設会社の献身的な活動もいろいろあったとききました。

さらに、献堂の始まりは、当時そこに主任司祭としておられたラサール神父の大いなる努力の賜物であると聞きました。そして、面白いことにラサール神父は、晩年には日本の「禅」にも傾倒した人であったそうです。日本に帰化して「愛宮真備（あいみやまきび）」という名前で日本人として生きたということです。「禅」とキリスト教の融合という東西霊性の融合という観点からの深い研究があったと伝えられ、最晩年には、ドイツで「禅」の指導をしたとも伝えられています。このあたりに大変な興味をぼくは覚えました。ラフカディオハーンの話にも通じる話のように思いました。

建築にかかわる人間のひとりとして、魂のこもった建築というものはこういうものかを、恥ずかしながら今更のように思った次第です。かつて、日本にこういう、すごい建築家とその建築への人々の気持ちの結集が存在したことも誇りであるとも思います。昨今の耐震偽装に見るような人間不在、むしろ悪魔がすむような建築と全くの対極の存在です。建築に関わる人間の一人として、さらに一人の人間として、やはり人間を信じたくなるような感動を、本当に久方ぶりに覚えました。最高のいい小さい旅ができました。幸せな気持ちになった半日でした。

写真を載せておきます。何かの機会に、是非、ご覧になることを心からお勧めします。今月は、すがすがしい観光案内になりました。